

『シェアとコモンズ』（2014.1月）

昨年暮れに、「シェア奥沢」(多摩美の堀内正弘先生宅の住み開きの実践活動)という場所で『本当のシェアを考える』というテーマのミニシンポジウムに参加しました。その場で面白かったのは、「コモンズ」と「シェア」の違いについてでした。現代コミュニティ政策のキー概念の1つである「地域共同管理」という言葉とコモンズという言葉には、深い関係性があると思うのですが、シェアという誰かのものを共同利用するというもう少し小さな範囲の出来事のようなイメージを持っていました。

コモンズ空間の具体的なイメージをあげると、都市部では大型のマンションなどの共用空間が頭に浮かびます。共用財産のない(町内会の会館などが共有財産になっている場合はある)戸建て住宅地のコモンズを考えていた僕には、シェアという考え方はむしろ意外であり新鮮なものと感じられました。戸建て住宅地にシェア空間のネットワーク(堀内先生はシェアハブと呼んでいました)を生み出すという考え方は、地域共同管理を実現する今日的で、案外実践的な概念かも知れません。

所有を共同化するのではなく、私有のスペースを中心とした社会資源の利用をシェアすることで、生活を共同化するという戦略です。そう考えると、最近農村部で拡大しつつある集落営農のような社会的共同経営体の方式は、農地の所有権を移転しないので、圃場のシェアといえるのかも知れません。

コモンズとシェアの事例を地域の中に多様に生み出していくこと、「わたくし」と「みんな」の間の可能性を分厚くしていくことが、現代の「コミュニティ・マネジメント」の重要な課題の1つだと考えた次第です。

「非営利復興」というアイデア（2014年3月）

3月の始めに陸前高田に1年ぶりに行ってきました。中心部に大きな変化の兆しが見え始めていくことに戸惑いを覚えたので、この事態をどう理解したら良いかを考えてみたいと思います。昨年まで残されていた被災した市庁舎は既になく、保存された一本松のシンボルは、かさ上げ工事のための完成間近な巨大ベルトコンベアの陰にひっそりとたたずんでいました。広域から集められたダンプカーの砂埃と渋滞が毎朝の風景になっているようです。人口1万9千人の街の復興に投入される土木工事の巨大さに、ただただ圧倒されたというのが正直な思いでした。一昨年見た一面に広がる荒野のような風景にも言葉を失いましたが、今回の復興工事の巨大さにも再び息をのむ思いでした。

そこで出会ったのが、饗庭伸さんが提案している「非営利復興」(註)という言葉だったのです。従来の土地の価値をエンジンとして成立してきた「近代復興」に対して、土地に価値がないことを前提にして、漸進的に長い時間をかけて地域空間に資本とソーシャルキャピタルを蓄積していく方法を饗庭さんは、「非営利復興」と呼んでいます。今、行われようとしている近代復興には、地元の市民や全国の復興支援に関わっている多くの人たちが大きな違和感を感じているのではないかと思います。言葉で言うと簡単になりすぎるかも知れませんが、持続可能な未来を信じていくことができない不信感、膨大な無駄と負債を残すことになりはしないかという不安感、東北復興から始まると期待した新しい価値観が、全く逆の過去のやり方によって忘れられようとしている喪失感など、ぬぐい去れない違和感の原因を上げてみることはできません。

復興は進んでいないのではなく、とんでもないお金とエネルギーによって進み始めています。しかし、明らかにスケールアウトしているように思えてなりません。饗庭さんが指摘するようにこうしたマッチョな近代復興によって広大な被災地をすべて埋め尽くすことはできないのでしょうか。そうであるが故に、見えにくいかも知れませんが、全国の支援する多くの人たちの思いが直接届く、無数の小さな非営利復興に着目していくことが、さらに必要になるのだと思うのです。

(註)『建築雑誌』 Vol.129 No.1655 P16-17
「低平地の課題－近代復興から非営利復興へ－」
饗庭 伸

施設づくりワークショップ再考（2014年4月）

愛媛県伊予市で久しぶりの施設づくり（図書館、文化ホール、公民館の複合施設）のワークショップにたずさわることになった。コミュニティ・デザイナーの山崎亮さんに習って、事前に参加者を掘り起こすためのヒアリングを試みている。地域には実に様々な人材がいることと、自治体の規模が大きすぎず、市民とのネットワークを行政職員個人が持っていることを実感するヒアリングとなった。

最近では、公共施設を設計する場合、市民参加のワークショップを組み込むことが常識となりつつあるようである。伊予市でも現在建て替えが進む市庁舎の設計にあたっては、市民参加のワークショップが実施されたとのことである。こうした設計ワークショップに求められていることが何であるのか、改めて考えさせられる機会ともなったのである。

ワークショップでは、設計内容に市民の声を反映する事もさることながら、現実には管理運営を市民協働で取り組むための人材発掘や運営団体の組織化が求められている場合も少なくない。しかし、行政側には建設と運営を所管する部署が違うという問題があり、設計者側には事前の参加者構成のデザインにまで踏み込む問題意識が不足しているという問題がありそうである。こうしたことを考えると、ワークショップの実施が一般化したとは言え、やや物足りない成果に終わる事例が増えていることは容易に想像できる場所である。逆にコミュニティデザインと呼ばれる方法が注目を浴びている理由はそのあたりにあるのであろう。

今回の伊予市の場合も行政担当者や活動市民に対するヒアリングを進めていくに従い、次第にこうしたコミュニケーション課題が見えてきたところである。設計内容と同様のあるいはそれ以上の関心が、施設建設の目的や施設運営への市民参加に向けられているのである。そこに寄り添い市民の再組織化にまでつながるワークショップを実施できなければ行政の期待に真に応えることにはならないという思いを改めて強くしているところである。

シェアという魔法の言葉（2014年6月）

コモンズという言葉に関心を持っているが、シェアという言葉に一般レベルでの関心が広がっている。先日、「シェア奥沢」という民間のコミュニティの拠点で空き家を巡るシェアトークが行われた。

シェアハブを提唱するシェア奥沢のオーナーである堀内さんの実践活動は、確実に広がりを生み出しているようだ。介護の必要なお母さんを単身で抱え、長時間外に出かけられないハンディを逆手に取り、自宅の一部をシェア空間にしてフェイスブックを伝達手段にネットワークのハブを自宅に築きつつある。出かけられないのであれば、みんなに来てもらうというのはとても良い発想だと思う。

当日は、空き家活用の実践者や関心のある人が世田谷区に限らず集まり、グループディスカッションによる学びの場を持つことができた。僕たちのテーブルのテーマは、『空き家は、地域の宝物』である。「開くことで豊かになる」、「与えることで得る」、「みんなのものにすることでつながる」これらの言葉は、ボランティアの基本とも重なる考え方だが、空き家活用にも同じ事が言えそうだ。空き家や空き室が自分だけのものであると考えている限り、やっかいな悩ましいモノであることは、不動産を持っている人ならば誰でも感じたことがあると思う。しかし、このやっかいな宝物をいろいろな人とシェアすることに決めたとたん、やっかいな宝物は、不思議な宝物に姿を変える。お金以外の様々な価値を生み続けてくれる持続可能な資源になるのだ。まるで打ち出の小槌のように。

お金は、腐らないし、貯めておくことができるし、利子を生み出す便利な道具であると説明される。しかし、すべてのモノをお金の価値に置き換えることによって私たちは、持続的な価値創出の仕掛けを見失ってしまったのではないだろうか。生き物は、腐るし、死んでしまうけれども持続可能な価値創出の仕掛けを持っているように見える。空き家にも生き物のような価値を吹き込むことが、空き家活用の要点であると思う。まちづくりも同じだろう。まちを生き物のように捉え、腐らないように大切に育てることで生み出し続けることができるものこそが本当の価値である。まちを不動産の価値だけで考えることは無限に生み出される価値の可能性を見失うことであり、空き家問題はまちを生き返らせるツボのようなものではないだろうか。ツボは押さねばなるまい。そして、最後はおいしい共奏キッチンで締めくくりとなった、食べることは何事にもましてすばらしい。

参加のまちづくりと民主主義の成熟(2014年8月)

参加のまちづくりと民主主義の成熟という視点から若干の考察をしてみたい。日本における参加のまちづくりは、まちづくりワークショップの導入によって1990年代から全国に展開していった。一方、世界に目を向けると民主主義の理論的研究と実証的研究の場においては、競争的(自由)民主主義に対する疑問から熟議民主主義が世界的に注目されるようになりつつある。まちづくりの現場では、審議会制度や専門家に対する不信感を背景に、誰もが自由に参加し小グループで熟議する形式の市民ワークショップが先進的事例として積み重ねられてきた。協働概念の広がりとともに市民ワークショップは次第に標準化され、現在では公共施設づくりの仕様書にあたりまえのように条件付けられるまでになっている。

参加民主主義に期待される内容をやや丁寧に見ていくと、意見形成と主体形成という二つの側面があるように思う。主体形成は「政治参加」に対応し、意見形成は「政治的平等」に対応している。さらに言えば、主体形成の議論は「協働」の概念に結び付き、意見形成の可能性は「ミニ・パブリックス」の概念によって精緻化されてきている。

しかし、問題の本質を見失ってはならない。参加のまちづくりが目指してきたのは、あくまでも自治を育むようなコミュニティ形成の実現であり、「私」から「私たち」を生み出す民主主義の実践なのである。

アメリカの政治学者ジェイムズ・S・フィッシュキンは、その著書『人々の声が響き合う時－熟議空間と民主主義－』(早川書房 2011)の中で民主主義のトリレンマとして、大衆の「政治参加」と少数意見を尊重する「政治的平等」、そして少人数による「熟議」を同時に実現することの困難さを指摘している。多様な意見形成が行われる「公共の場」を育みながら、自治の主体を形成する新しい民主主義の姿が今ようやく生み出されようとしている。地域自治区のような小規模地域への分権制度(協働)と無作為抽出によって形成される熟議空間(ミニ・パブリックス)の結合にその可能性が広がっていると考えられる。

現在、愛知県豊山町では、毎年2,000名の町民を無作為抽出し、50人ほどで町の総合計画をテーマにした2日間の町民討議会議を5年間継続開催することとし、今年4回目を実施した。豊山町において実施されている町民討議会議は、まさに戦後民主主義の探求者である丸山真男の主張した永久革命としての民主主義の試みともいえるものである。

豊山町町民討議会議のヒアリングから感じたこと(2014年11月)

前回もお話しした豊山町での町民討議会議の連続開催について、先日今年度参加された参加者5名の方に直接ヒアリングをする機会を得た。これは、小規模自治体(コミュニティ規模)における無作為抽出による熟議の繰り返しが新しい民主主義の可能性を拓くことができるのではないかという仮説に基づいた調査研究の一環である。

当日は、中学生、高校生、30代、50代、70代と多世代の方に偶然集まって頂くことができた。簡単なヒアリングではあったが、2日間に及ぶ話し合いの時間の意味が明らかになったように思う。

「町民討議会議の広がり」、「参加動機」、「参加したことによる意識の変化」を主にヒアリングしたが、印象に残ったいくつかの点についてここでは紹介してみたい。町民討議会議の広がりについては、毎年2,000人に対して招待状を出して4年目になる。ヒアリング対象者の方は、すべて初めての参加であるとのことではあったが、2回目の招待であったり、第1回目に娘さんが参加した方がいたり、知り合いの方に招待状が来たことを知っている人が複数いた(5人中3人)。参加した人は、家族や友人、先生、近隣の方などに町民討議会議の様子を話していることもわかり、4年目にして想像以上の広がりを見せていることが明らかになった。5名すべてが再度参加してみたいと答え、他の人には参加した方が良いとアドバイスしたいと答えたのには正直驚いた。参加して良かったと思った理由の多くは、世代を超えた話し合いの面白さや他の参加者と個人的なつながりができて良かったということである。他に参加動機として豊山町の現状を知る機会となったことや話し合いのスキルを学ぶことができたという発言もあった。とりわけ京都の専門学校に行く予定の高校生は、京都で働くつもりであったが豊山町に帰ってきたいという気持ちになったという発言は印象に残った。こうしてヒアリングの結果を聞いていると、若い人ほど大きな意識の変化を感じているようである。さらにこうした討議の場が行政にも少なからず変化を与えていることも確かである。しかも、5人の方達が自分たちは町民討議会議に参加した人々の中で決して特殊ではなく、むしろ多数派であると思うと語ったことも町民討議会議の影響力の大きさを想像させてくれる。

わずか4回の町民討議会議によってこのようなつながりが生まれていることを聞くと、豊山町に奇跡が起きつつあるのかも知れないと感じられる

ほどの成果である。繰り返しになるが、豊山町の町民討議会議の特色は、母数となる住民規模が小さいということと何回も繰り返されているという点にある。このことがコミュニティ意識を生成し、自治に対する自覚を高めるとするならば、これはきわめて効果的かつ実効性のあるコミュニティ政策と言うべきであろう。

『植村さん、さようなら』（2014年12月）

玉川まちづくりハウスの発足以来大変お世話になったご近所の長老の一人が、85歳で先日お亡くなりになった。考えてみれば、玉川まちづくりハウスがNPOになって、十数年になるので、植村さんは当時まだ70歳ほどであったということになる。植村さんからはたくさんのことを教えて頂いた気がする。その中のいくつかの言葉は僕の宝物である。曰く、『議論は、具体的でなくはいけない』、『70になって友達ができるというのは大変なことだよ』、『やりたいことがはっきりしているのであれば、お金なんてものはどうにでもなるものだ』等々。

先日、2010年に何人かで植村さんを囲んでお聞きした録音を改めて聞き直してみた。高浜虚子の思い出話、フルブライトの給費生として異文化交流をしたときのお話、イギリス時代のコンサート三昧のお話、イギリスの本物の貴族のお城を訪ねたエピソード、霧のロンドンの出来事、ザルツブルグ音楽祭の経験がその後のビジネスマンの人生を変えた話、大阪万博で富士銀行グループのパビリオンをプロデュースした時に会った多士済々の人々のお話、アメリカの投資銀行買収のお話、今から思えば、彼の波瀾万丈の人生の一端を直接聞くことができただけでも貴重な経験である。彼は分け隔てなく、僕らにも本物とはどういうことかということを経験の記憶力と巧みな話術で教えてくれていたのだ。地域には実にいろいろな方がいるものである。玉川まちづくりハウスの活動をしていなければこうした出会いはなかったに違いない。コミュニティの豊かさとはこうした出会いと時間が持てることなのだろうと改めて思う。

『耕すようにまちを育てる』をコンセプトとして始めたコミュニティデザインの実践活動の意味が、一つずつ具体的に実感することが多い今日この頃である。